CONNECT つなぐ

今こそ支えたい㊦

船と仲間率いゴールへ

サポート役に転身

パラリンピック

東京パラリンピックを目指し、ボート混合かじ付きフォア日本代表として練習に励む健常者アスリートがいる。障害の有無に関係なく出場できるかじ取り役「コックス」の立田寛之選手(28)だ。新型コロナウイルスの感染拡大で大会の開催が危惧される中で、あえて広告会社を退社し、人生を懸ける。その思いとは。

1月8日の緊急事態宣言再発令を受け、神奈川・相模湖での強化合宿が中止された。思うように練習を積めないが、立田選手は体重55キロをキープしている。顔の輪郭もシャープだ。「体重が1キロ増えると、タイムが1秒遅くなると言われているので、食事にも気を使う」と笑う。

混合かじ付きフォアはコックスが手足や視覚に障害がある男女4人のこぎ手を一つにまとめ、2000メートルの直線コースで競う。「誘導や補助で選手の体を触る場面もある。手洗いやうがい、消毒は欠かさない」と細心の注意を払う。

かじ取り以外にも、こぎ手に声を掛ける重要な仕事がある。周囲の状況を把握しにくい視覚障害者と、動きに制約がある肢体不自由の選手が息を合わせてこぐことは難しく、声掛けの力量はタイムに直結する。立田選手は状況に応じてフェースシールドやマスクなどで感染防止対策を施し、残りの距離やタイムなど具体的な情報を伝える。失速しがちな終盤では「飛ばせ」「耐えろ」「最後まで」と畳みかけるように声を掛ける。

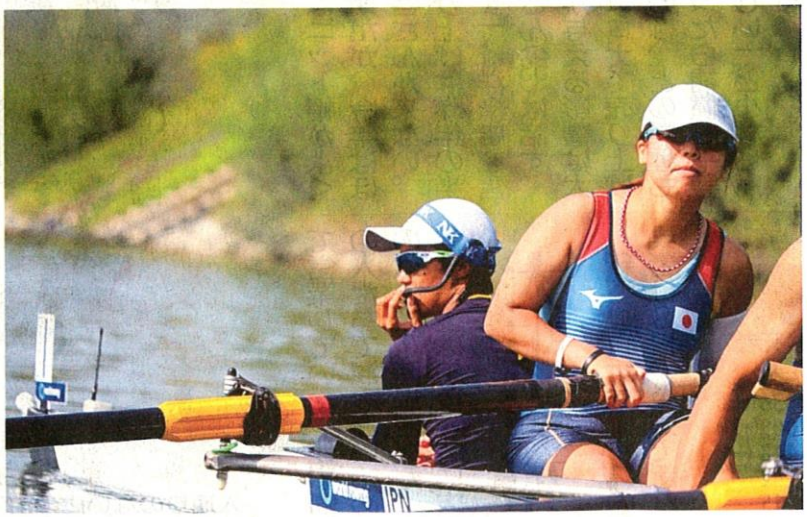
日大卒業後、大手広告会社に勤めながら戸田中央総合病院ローイングクラブ(埼玉県)で競技人生を送り、2017年アジア選手権の男子エイトでは銀メダルを獲得した。しかしレベル的に日本はエイトでの東京オリンピック出場が厳しかった。そんな時、パラの日本代表チームがコックスを募集していると知り、応募。立田選手は「どんな形であれ、世界と戦える環境に身を置く方が自身の成長につながると思った」という。

ところがパラアスリートとの出会いが立田選手の人生を変えた。「一緒に練習して選手のことを理解し、レースでどんどんよくなっていく楽しさを感じた。最初は自分のレベルを上げるための手段と考えていたパラが、目的になっていた」と振り返る。

立田選手は19年6月から会社を休職。東京パラリンピックの1年延期が決まった半年後の昨年9月には、退職した。「やるのかやらないのかわからない中で、自分の時間を費やす価値があるのかという心の浮き沈みがあった」という。だからこそ、言い訳できないように退路を断った。今は貯金を取り崩すなどして、活動資金に充てている。

職をなげうち、東京パラリンピックに突き進むが「スポーツよりも優先されるべき大きなテーマがある」と、声高に開催を訴えたりはしない。しかし、静かにこうも願う。「どんな形になるにせよ、この選手たちと一緒に、ゴールまでたどりつきたい」。立田選手はフィニッシュラインを通過する瞬間を思い描きながら、仲間を支え続けている。

【高橋秀明】



㊤パラリンピック・ボート日本代表コックスの立田寛之選手
㊦こぎ手に指示を出すコックスの立田選手（左）＝本人提供